# 参考　人生の〈救い〉としての詩

作者

## 鮎川信夫

大正九（一九二〇）年～昭和六十一（一九八六）年。詩人・翻訳者・評論家。本名、上村隆一。東京市小石川区（現・文京区）に生まれる。父・上村藤若は啓蒙雑誌や書籍の刊行を手がける事業家で、郷里である福井県石徹白村（現・岐阜県郡上市白鳥町石徹白）の名士として、地縁共同体や農村の振興を標榜していた。東京に育ち都会の自由な空気を好んだ鮎川は、時に父親の出版業を手伝いながらも思想面での軋轢を感じつつ成長する。

昭和八年、淀橋区戸山小学校を卒業、早稲田中学に入学。中学時代には萩原朔太郎や生田春月の詩に耽溺するが、こうした抒情詩からの離脱は早かった。昭和十二年、早稲田第一高等学院に入学。この年、モダニズムの影響を受けて書いた詩が文芸誌『若草』の投稿欄に次々と採用・掲載される。これをきっかけに中桐雅夫や衣更着信ら同年代の若手詩人たちと知り合い、詩誌『LUNA』に参加。『LUNA』は後に『LE BAL』と誌名を変え、北村太郎や田村隆一、三好豊一郎らが加入。若い世代にふさわしい清新なモダニズムを追究する方向性を共有し、後に戦後詩を領導する「荒地」グループを形成する主要なメンバーがここに集まった。

昭和十四年、早稲田高等学院の仲間たちと同人誌『荒地』（第一次）を創刊。この『荒地』や『LE BAL』の仲間たちと、夜ごと新宿の繁華街で議論を交わし、文学的な自己形成をおこなった日々が、鮎川の生涯続く詩人としての原風景となる。また『新領土』や『文芸汎論』などにも詩を発表して地歩を固める一方で、時局に圧迫される詩壇の状況から、モダニズム詩の限界をも意識するようになる。

昭和十五年、早稲田大学英文科に入学。緊迫感を増す時代状況の中で、才気ある詩友のうち牧野虚太郎（病死）や森川義信（戦病死）らを失う。鮎川自身も昭和十七年に繰り上げ卒業となり入営、スマトラへ赴くが、昭和十九年、肺結核により病院船で帰国。父の郷里の石徹白で終戦を迎える。

昭和二十二年、旧『LE BAL』のメンバーを中心に第二次『荒地』を創刊。戦前・戦中にすでに磨かれていた詩的技術やT・S・エリオットなどヨーロッパ文学の素養に基づいて、現代文明社会の苦悩や絶望を打ち出す「荒地」の詩風は、一部では気取った観念的な詩という批判にさらされつつも大きな注目を集めた。なかでも鮎川は実作と同時に詩論においてもグループの支柱となり、時局に対して有力な抵抗ができず言語遊戯に堕した従来のモダニズムを批判、それを乗り越える新たな戦後詩の創出のための論陣を張った。

昭和二十八年、第五福竜丸被爆事件が起こると、全国の詩人たちが反戦反核を唱える中、鮎川はこうした集団的な主題の選択を

批判し大きな論争に発展する（「死の灰詩集論争」）。戦意高揚のための戦争詩を量産した年長世代が、そのままの方法論で反戦平和の詩を書くことを指弾した鮎川の主張は、戦後初期からの戦争責任追及と密接に関わっており、詩における社会的責任のあり方について一貫して問題提起し続けたと言えよう。

晩年にいたるまで国内外への政治的関心が高く、時事評論家としても活躍。コラムや評論のほか、エラリー・クイーンなど海外ミステリー小説の翻訳でも知られている。

## 出典

本文は「鮎川信夫著作集３」（思潮社　昭五十）によった。

初出は「詩と生活感情」、ジュニアそれいゆ臨時増刊『芸術入門』（ひまわり社　昭和三十）。初刊は鮎川信夫・疋田寛吉『抒情詩のためのノート』（ひまわり社　昭和三十二）、後にその増補新装版にあたる『日本の抒情詩』（思潮社　昭和四十三）に収録。その後、著者である鮎川の意向を交えてさらに再編集された形で「著作集」に収録。

## 解説

従来、鮎川信夫といえば戦中派世代の「遺言執行人」（鮎川の詩篇「死んだ男」の中の詩句）というイメージが強く、そのことが鮎川の評価を大きく左右してきた。戦死者を忘れまいとする態度が肯定的に評価され、詩が平和教材に活用されることもある一方で、日本人の戦友を悼み連帯しようとするあり方が、それ以外の他者を排除する「国民的友愛原理」であるとする観点からの批判（酒井直樹・坪井秀人「複数の「戦後」へと働きかける思考へ」『現代詩手帖』平十三・十一）も、現在まで根強く続いている。戦後、詩や詩論を通して直接的に戦争認識を表明した詩人であるだけに、論じ手の政治的立場によって評価が分かれやすく、教室での鑑賞および体系的な教材研究が難しくなりつつある詩人であると言えよう。

ただし鮎川が戦後の代表的詩人と呼ばれるのは、そうした直接的な戦争責任や戦争認識にかかわる文脈のみを根拠とするわけではない。殺伐たる現代社会を生きる人間にとって詩とは何か、という根本的な問いを、二度にわたる悲惨な世界大戦の文脈をふまえて考究し、詩論という形で幅広い読者に向けて発信したことも、また、後続の世代に大きな影響を与えた所以であった。

本教科書では、鮎川が若い世代の読者へ向けて書いたそうした詩論の中から、読者各人の生を支える詩への希望に関して述べた箇所を収録した。本文中で鮎川は、人間にとっての〈救い〉とは常に「瞬間的なもの」にすぎないと述べている。これさえあれば絶対的に救われる、と言えるような希望はこの世にはない、という冷徹な認識を示したうえで、人生に何度でも訪れる苦痛や困難を乗り越えて生き続けてほしい、という読者への真率なメッセージとなっている。

## 参考文献

鮎川に関わる参考文献は数多いが、本教材の趣旨に即して「解説」に述べたことと関わる基礎文献を挙げる。全般的な伝記的事項や書誌に関しては牟礼慶子「路上のたましい」（思潮社、平四）および「鮎川信夫からの贈りもの」（思潮社、平十五）が詳しい。九〇年代から二〇〇〇年代にかけて相次いだ鮎川批判に関しては、酒井直樹・坪井秀人「複数の「戦後」へと働きかける思考へ」（既出・「鑑賞」参照）のほか、絓秀実「詩的モダニティの舞台」（思潮社、平二）や野村喜和夫・城戸朱理編「討議戦後詩」（思潮社、平九）が代表的なものである。そうした動向を含め、鮎川評価の変遷と問題点に関しては、田口麻奈「〈空白〉の根底　鮎川信夫と日本戦後詩」（思潮社、平三十一）所収「序論――研究史・問題点・展望」を参照されたい。

生徒が手に取りやすい鮎川の詩篇・詩論に関しては、現代詩文庫「鮎川信夫詩集」・「続鮎川信夫詩集」・「続続鮎川信夫詩集」（いずれも思潮社、昭四十三・平六・平十）や、詩の森文庫「現代詩との出合い」（思潮社　平十八）などがある。